

単に時間が過ぎ去った。

言葉を探した私が無くなる。言葉にならなかった感覚が流れる、それらは忘却されるのか、未来に飛ばされるのか？

さて、この考えるという物質になっている私は、ごうごうと音をたてて進む渦の中の私に何かを質問しようと四六時中、そのきっかけとそれに対する言葉を探している。

その渦の流れの中の私が見える秘密の覗き窓から、凝視している私と、私の中のもう一人の渦に巻き込まれた私は、未だかつて目が合わないまま存在し、共存の不自由さの中で衝突し続けてる。

私は反応するという物質になって、寒さで震えたり、暑さで弛緩し汗を流したり、傷ついて地を流したりする肉体の中にいる。それは、消耗されつつ、いつか灰になるまで、動き続けていく。既にそれは生きたまま灰になってる過程にあると同じではないか。言うまでもなく、その灰は見えないけど、灰は落ちてる、風に舞っている。

抽象的な形象にしか留めておけない観念、感覚。それはいくら理屈、つまり論理で考えても説明できないものである。人生経験を通じて、その現実に置ける工夫から出たもの。答えは理性や、感性を越えたところから出てくるもので、全身全霊で打ち込まねばならない。つまり、霊性的自覚が必要。

私はその抽象概念の破片、曖昧な雲をつまみ、味見しようとする？ 捕まえて取り調べしたいのか？ その私の抽象概念の実体化、体現化は私の単なる存在証明の生への足掻きのうろたえであるのかもしれないのに。

放棄あるいは、逃避してもいいのであるか？ といいいながらも、私は解読したいのである。言葉を探す。やめとけばいいのに、私は獲物を手探りで追うハンターになる。その曖昧なものとして残る何かは、実に不快、かつ意地悪である。

さて、何かが表現される。

それは単に宇宙に私を読みとって貰うための捧げ、言葉は消され解読されるべき暗号が残される。提示、掲示としての証明行為は、存在の輪郭をはっきりさせる為の自己尋問。そして執拗的アリバイ工作でもある。

私の中で言葉にされていない感覚、その私の曖昧な存在感はどう宇宙空間に反射されているのか？宇宙空間なんてとても大げさに聞こえるが、私の曖昧な存在への甘えという観念が今疑問符となって私の頭の廻りをぐるぐる廻っている。

異国に取り残されてしまった私。といった私自身を設定している私。孤独という状態にすっかり嵌り込んで、あるいは囲まれて全く心地よく自分を介護できる私に到達。ある安定の場を確保してしまった？” いやそんなはずは無い。いや、そうとは言えない、単に自己弁護をしたいだけか？脅迫観念とすら言えるこの自己捕虜は何故に起きるのか？

しかし、生命の危機感への配慮はわずかながらにあるので、破壊的な人生には至らない。そこが歯がゆいかなである。私はとても遠いところから何物かにリモートコントロールされて生かされているという気がする。動き働く機械。

この囚われの身はさほど悪くはないのだが、肉体は思考のスピードに間に合わないのである。言葉も思考に追い付かないのである。じゃあ、一体如何するか？ 自分から脱出するしかない？ さて、如何すれば良い？ 光だ！ 光が足りない。光がもっと要る。それと騒音だ！騒音，光，騒音，光。

渴望という名にぶら下がった私の苦悩。そこからやっと離れ着地した自我は、地平線に向かう眼差しと剥き出しの裸の神経を持つ。絡まる神経の束はシュートしっぱなしで、その閃光花火は脳裏に映される。私は丘の向こうの命を観覧しているのか、向う側からこちらの私を傍観しているのか？何をこれ以上見つめる必要があるのか？

握りの渴望。蛍の光のような渴望。またしても閃光を放つ。その 綺麗な光の幻聴が私の中で響き続ける。